

中島 あや子（国語学・国文学）

源氏物語の構想と人物造型

本論文は、『源氏物語』（以下、『源氏』と略称）を中心に据えながら、作者紫式部の〈思惟〉が作品にどのように投影しているかを、『紫式部日記』（以下、『日記』と略称）『紫式部集』（以下、『集』と略称）との詳細な対比を通して浮き彫りにしようとするところに最大の特色をもつ、意欲的な試みである。全体は、第1章「源氏物語の成立と構想」、第2章「紫式部の体験と創作」、第3章「源氏物語の人物造型」に分かたれるが、中でも第1章の第1節・第2節と第2章の第1節・第2節の4節が、相支えつつ、紫式部の〈人と作品〉に迫るものとして、本論文の圧巻といえよう。

第1章・第1節では、『集』所収歌126首の詠作年次の考証がなされ、同時に、『源氏』の作中歌との類似関係が多数指摘される。第2節では、第1節の成果を踏まえて、『集』『日記』と『源氏』との類似関係が洗い出されその関係性の意味が問われる。その結果、『源氏』の執筆開始は長保年間（999-1003）、第1部最終巻「藤裏葉」までは所謂〈玉鬘系〉の諸巻も含めて寛弘5年（1008）春以前の執筆、第2部最終巻「幻」の成立は寛弘5年5月6日以前で、『日記』に見える同年11月の冊子作りは「幻」巻までの清書であろう、宇治十帖の執筆は寛弘5年10月10余日以降で、『源氏』の完成は寛弘6年夏もしくは寛弘7年6月中旬までとする説が妥当、と推論する。

第2章・第1節では、古来『源氏』54帖中の白眉とされる「須磨」巻の歌に、長徳2年（996）紫式部が父為時に随伴して越前国に下向したおりの歌との類似が集中して現れることを指摘、つぶさな検討を経て、自らの痛切な離京体験を光源氏の須磨流謫を描くさいのベースに据えたことが、情感溢れる「須磨」巻のすぐれた表現性をもたらした一因であると説く。第2節では、『源氏』と『日記』の記述の酷似を手がかりに、愚かしい笑われ者として描かれる末摘花の描出に、意外にも作者紫式部の自画像が投影していることを指摘する。さらに、「末摘花」「蓬生」両巻に『集』の歌との類似が見出せることから、作者自身のストレートな反映と見られる明石君などは異なる、屈折した人物造型のありかたを、そうした手法を用いる作者の〈思惟〉が注視されている。

そのほか、第2章の第3節・第4節では、『源氏』に描かれる親子関係に、紫式部の実体験が色濃く投影していることを、『集』の歌との類似によって指摘するいっぽう、『源氏』のような描きかたがきわめて特異であることを、平安朝前期の物語6作品と対比しながら、具体的に明らかにする。膨大なデータが的確に整理されており、大変な労作といえよう。

また、第3章では、藤壺・夕顔・浮舟という3人の重要な女性の造型を検討し、藤壺は光源氏との間に一線を引いて終始揺らぐことのない存在であること、夕顔は「柔らかな自意識」を備えた女性として造型されていること、物語の終末に至っても浮舟の俗世拒否は微動だにしないこと等、いずれも丁寧な物語読解により説得力のある論となっている。

以上、本論文は、近年おろそかにされがちな、『源氏』を作品研究と作家研究の両輪によって推進しようとする、きわめて正攻法の研究と評することができ、多くの創見を含み、今後の研究を裨益するものであること、疑いを容れない。よって本調査委員会は、申請論文の提出者が博士（文学）の学位を授与されるに十分であると認める。